常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年２月１９日(金)

◇ with コロナ

早いもので、本校への赴任以来、あと１か月半程で １ 年が経とうとしている。
振り返れば、新型コロナ対策に頭を悩ませた年ではあったが、学校も、職員も、そして子供たちも、コロナに振り回されてはいない。コロナと向き合ってきた。
だから、コロナ対応で学んだこと、身に付けたことも確かにあると言い切れる。

私事ではあるが、私生活でも見事に出歩かなくなった。この歳になって自制心が格段に高まったのではないかと勘違いしてしまうほどだ。
家族の存在も大切ではあるが、子供たちと接する教職を生業としていることが行動を抑制し、自己をコントロールできる最大要因であることは間違いない。

確かに「新しい生活スタイル」に呼応するためには、これまでにない配慮に迫られた。しかし、慣れてしまえば、【あたりまえ】に変わる。

マスク装着は【あたりまえ】。
教室の換気は【あたりまえ】。
給食配膳時・摂食時の私語慎みは【あたりまえ】。
登校前の検温は【あたりまえ】。
指先を重点に石鹸で手を洗うことは【あたりまえ】。
手指への「消毒液をチュッ」は【あたりまえ】。
※「しゅし」を変換すると、最上位が「趣旨」。続いて「種子」「主旨」…であったが、今や「手指」があたりまえ。
学校生活や家庭での【あたりまえ】が増えた。

児童の体調不良による欠席の少なさやインフルエンザ感染ゼロの実態から推し量れば、with コロナの新しい生活スタイルの定着が学校の安全衛生を向上させたといえる。

新しい生活スタイルが始まり、ほぼ一年。
児童や教職員の「気のゆるみ」がないかといえば、言い切ることはできない。

わずかながらではあるが、「小さなほころび」が確かにある。
「小さなほころび」が大きくなる前に手を打つことが重要だ。
２月１日（月）の保健委員会で
「最近は、登校した後、手を洗わずに教室に入る子もいるので、とても心配です。」
との意見が出された。
これは、すばらしい発言だ。
発言者の意見の根本には、【自分がしっかり行っている事実】がある。
また、発言の中に、【コロナ対応を皆で行う意義】を含ませている。
さらに、「このままでは心配だ」と【柔らかな警告】を発している。

児童の発言を受けて、委員会担当教師も動く。
委員会の時間だけでは深まりが足りなかったことから、翌日の２日（火）に臨時の保健委員会をもっている。

他の動きもある。
臨時委員会と同日の２日、お昼の放送で保健委員長から手洗い状況の報告があった。その放送を耳にし、すぐに状況把握と指導にあたった担任もいたと聞く。
【鉄は熱いうちに打て】【指導はタイムリーに】
指導の鉄則である。

さらに２日後の４日（木）の職員会議では、
「子供たちが登校する前に出勤し、教室で子供を迎えましょう」という発案が教員から出て決議に至り、12日（金）まで自主的に行動してくれている。

担任陣の女性は主婦ばかりで、朝の時間帯は大変である。それでも家庭の時間をやりくりして早期出勤で対応する姿勢には、本当に頭が下がる。
「働き方改革の波」が押し寄せている最中（さなか）にである。

その後の子供たちの様子を見ると、以前の【あたりまえ】が戻ってきた。
【自浄】・【自助】・【共助】がうまく作用している。

一番ほっとしているのは、我々教員ではなく、保健委員会で勇気を出して発言した子供であろう。

「発言してよかった。」　この思いが、次につながる。